

文学部生の学生生活

リアルな!

Vol.45

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

思う存分悩める場所で

文学部人文社会科学教育専攻4年
福岡県立小倉高等学校出身

井上 未菜



これがなかったら、今の自分はどうなっていたらと思う出来事がいくつかある。

まず思いつくのは、1年生の11月頃のこと。教育学研究室で、友人に「読書会」とやらに誘われた。聞けば、教育学専攻の池田先生と学生が数名集まって、「人権」を軸にいろいろな話をするのだという。興味を持って行ってみると、「読書会」だというのに映画を観た。イタリアで精神病院を廃絶した話だった。内容も衝撃的だった



読書会で刊行している「DELIER」

が、映画を観終わってからも「教育っぽい」と当時の私が思っていた「話」が一向に始まらなかったことにも驚いた。これも教育学なのか? いや、カンケイナイのか? と混乱した。先生と先輩が、何やら難しい話をしていて、正直よくわからなかった。それでいて、ちっとも要領を得ない私の感想を、皆は真剣に聞いてくれた。奇妙だけれど、非常に魅力的な空間に思えた。

読書会はほぼ毎週行われた。教育の話はもちろん、旅行や読んだ本の紹介をすることもあった。その中で、いろいろなことに気付き、そして学んだ。自分なりに、たくさん考えた。だからといって、すぐに何かから解放されたり、楽になったり、解決策が出てきたりするわけではなかった。それでも、自分や、自分の周りで起こっている具体的な一つ一つの物事の見方が、少しずつ変わっていくのはとても面白かった。私にとって読書会は、いつも凝り固まった頭に風を通し、「そうではない考え方」を

教えてくれる場である。

2年生になり、授業はすべてオンラインで行われるようになった。図書館は閉まり、友人にも会えない。そんな中、「人権」というワードでインターネット検索し、NPO法人ホロコースト教育資料センターが主催する大学生向けのオンラインイベントを見つけた。「ホロコースト」という言葉さえ知らなかった私だが、イベントに参加し、歴史をたどったり今のドイツが過去を記憶しようとしていると聞いたりする中で、自分の興味関心にどことなく近いものがあることに気が付いた。何度か参加している

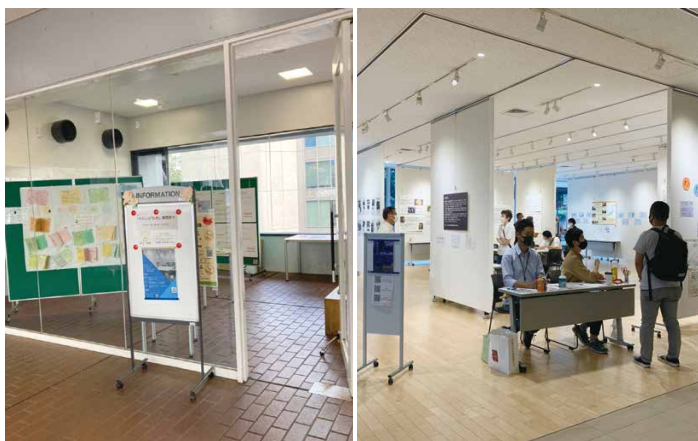
と、10月末、私と同じようにイベントに参加していた学生たちからあるメールが届いた。「ホロコーストは現代の身近な問題につながっており、歴史の項目ではないと思う」「私たちに何かできることはないか」と思い、できるだけ実感が伴うように、文字だけではなく体験できるような平和ミュージアムを作りたい——そんなこと

が書いてあった。歴史を専門に勉強しているわけではない私に何かできるのかと不安に思いつつ、興味に押されこの企画に加わることとなった。

ミュージアムの計画は、開催時期と場所以外、何も決まっていない状態でスタートした。集まったのは、住んでいる場所も専攻も異なる9名の大学生。毎週オンラインで顔を合わせ、それぞれの関心を話しながら、コンセプト、展示内容、配置を決めていった。キーワードは「対話」。展示物には、ホロコーストについて考える中で私たちに生まれた「もやもや」が詰まっている。私たちの対話が、来場者を巻き込み、会場全体が対話の場となることをめざした。こうして、2021年8月10日〜15日、埼玉県の大宮図書館で、「わたし」と「れきし」展—ホロコーストの記憶と今を生きる私たち—を開催した。この名称には、当たり前ものとして語られる「歴史」への抵抗や、それを疑ってこなかった「私」を

間い直したいという意味を込めた。6日間で500名以上の来場者を迎え、その中には、ご自身の戦争体験を話してくださる方や、ホロコーストについての授業を作っている最中だという教員の方もいらつしやうした。展示を囲んで対話が生まれ、異なる経験や視点が入り混じる場が作れたのではないかと思う。展示活動はその後も継続的に行って、今年度の11月には中央大学で開催することができた。置いておいた感想用紙には、来場者の方々に率直な思いをたくさん書いていただいた。展示の内容や活動を反省しつつ、今後につなげていきたいと考えている。

自分が大学に入学して間もないころ、



中大での展示の様子

大宮での展示の様子



展示を作ったメンバーと

「大学は、良い先生、良い先輩、良い同期と出会えるところだ」と友人に言われた。自分の4年間を振り返ると、本当にその通りだったと思う。そして、今では大学の外にも良い仲間がいる。何かに心を動かされたり、感じるものがあったり。そんなとき、話を聞いて一緒に考えてくれる人がいるということに、何度も何度も助けられた。悩んで、迷って、答えが出ないことばかりだけれど、それも悪くないと思えることが増えた。

専攻している教育学と、読書会でのざつぐばらんな話、展示を通して考えた歴史や「展示する」ということ。そのほかにも、今、関心を持っていることがいくつもある。これらの関連性はまだはつきりと見えていないが、根本のところでは何か共通しているものがあるのではないかと感じている。広く、深く、これからも考え続けていきたいと思う。

文学部だより

情報の宝庫を活用して

文学部事務室 堀口 優子

自然豊かな多摩キャンパス周辺の木々はまだ裸木ですが、日差しの中に少しずつ春の気配を感じるようになってまいりました。ご子女はいかがお過ごしでしょうか。

2022年7月1日付で文学部事務室に異動となりました堀口優子と申します。入職後、学事部研究助成課（教員の研究サポート）や図書館情報資料課（図書の発注・受入・目録作成等）の業務をしてまいりましたが、学部事務室勤務は初めてとなります。多くの学生が行きかい、授業のチャイムが鳴る環境にもようやく慣れてまいりました。

文学部には13の専攻と1つのプログラムがあり、それぞれに個性あふれる学問の世界が広がっています。各専攻には共同研究室があり、学ぶ学問の図書が身近にある環境があります。さらに多摩キャンパスには中央図書館（写真）があり、本学には240万冊を超える蔵書があります。小説の文庫本など手に取りやすいものから、これまでの大学の歴史と共に長い時間をかけて収集されてきた資料、現在は入手できな

い貴重な図書などさまざまな資料がそろっています。読みたい図書を図書館システムで検索し借りることも多いかと思いますが、時には図書館の書棚の間をぶらぶらしてみることをご子女におすすめてみてください。こうしたブラウジングによって、思わぬ資料に出会うなど新しい発見があると思います。また一つの図書のあとがきや参考文献から、芋づる式に興味のある分野が広がることもあります。

冊子体の資料はもちろんのこと、電子ブックやデータベースの電子資料もあります。自宅から利用できる電子ブック、辞書、新聞なども多く、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、より充実してきています。学生はGoogleなどの検索エンジンから情報を得ることに慣れていますが、正確性の求められる学術情報を検索するには、データベースに関する知識や検索キーワードの立て方、コツを身につける必要があります。文学部では入学時に図書館が実施している図書館講習会を受講することにより、「学術的に信頼できる情報」を入手する基本的な方法を学ぶようおすすめています。

こうした図書や学術情報に触れられるのも、大学ならではの環境だと思います。是非こうした環境を有効活用して、視野を広め、密度の濃い、深い学びを共有する時間をもっていただければと願っております。

